

る。なお温度係数については組織、動作点などの関連性について検討を必要とする点が多い。この可逆変化による磁束変化の防止対策としては整磁鋼を副磁路として使用する。

不可逆変化：温度変化による不可逆的な減磁は高温側と低温側の両方においておこる。これは従来は熱減磁といわれていたように高温側にのみ生じ、事実古い形の磁石たとえば等方性 Alnico, Cr 鋼, KS 鋼などはこれに該当していた。しかし新しい材料である異方性 Alnico, Ba フェライトなどは低温にもつてきた後常温における磁束を測定すると顕著な減磁がみとめられる。この中で Ba フェライトは低温例でのみ減磁が生じるのが特徴である。

VI. 結 言

近代の永久磁石の研究における諸問題について概説した。しかし紙数の都合でその一つ一つにつき具体的な実験データを挙げて説明することができなかつた。永久磁石に関する研究は、わが国が世界の水準をぬいていたことはうたがう余地はない。しかし現在もなおそうであるかという点については自信をもつていうことはできないのは残念なことである。

最後につけ加えたいことは現代の永久磁石のほとんどすべてがわが国の研究者によつて発明されるかまたは緒口がつけられたものであるにもかかわらず、その工業化と改良発達を外国に委ねてしまつていゝという事実である。これは研究者も自省しなければならないことであるが、研究と実用性との間における険しい谷をうめるために政府当局も事業家も深い考慮をはらつていただきたいものである。(昭和 33 年 7 月寄稿)

正 誤 表

第 44 年 7 月号所載“鋼浴中の酸素分析試料採取法に関する研究”中次のごとく訂正す。(著者申出)

頁	行	正	誤
756	左上より 5	不透明石英管	石英管
757	左下より 13	不透明石英製保護管に	保護管に